まえがき

本書は、2021 年に京都大学人間・環境学研究科に提出した博士論文「1970 年代のイタリアにおける民主的言語教育に関する史的研究―言語学者トゥッリオ・デ・マウロが構想した plurilinguismo とその教育―」を加筆修正し、デ・マウロのバイオグラフィーおよび「10 のテーゼ」の日本語訳を追加したものである。

筆者が CEFR や複言語・複文化主義という言葉を始めて耳にしたのは、イタリアで日本語を教えていた 2005 年頃であった。国際交流基金がその動向をとらえ、日本語教育への応用に向けて議論が高まり始めていたが、当時、筆者はその噂を一教師として聞いた程度で、まさか自身がそれに傾倒し研究を行うとは想像もしていなかった。

しかし帰国後も、日本において次第に存在感を増してゆく CEFR について、たびたび目にし、耳にすることとなった。日本語教育に限らず、外国語教育においてこれほど CEFR が着目されたのは、言語教育に携わる者であれば、だれもが日々経験する感覚的なものが、そこに言語化されていたからではないか。複言語・複文化主義や共通参照レベル、能力記述文、ポートフォリオ、自律学習など、そこに記された教育思想や教育的ツールはいずれも、言語教師にとって合点がゆくものだった。

筆者もそう感じた一人であった。日本語教育に携わるなかで「言語を学ぶことは我々に何をもたらすのか」と考えるようになり、その答えが複言語主義にあるような気がしたのだ。自身が学校教育で英語を学び、その後イタリア語を学んだこと、また日々接する留学生が第 2、第 3 外国語として日本語を学ぶこと。これらは各々の人生、あるいはその社会に何をもたらすのか。言語を学ぶ根源的な意義を知りたいと考えたのである。

その探求心から恩師となる西山教行先生の研究室を訪ね、本書の冒頭でも紹介するコスタンツォの論文に出会ったことが、本研究の始まりとなった。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

研究を始めてからは、イタリア固有の plurilinguismo の解明に没頭し、民主的言語教育の提言者トゥッリオ・デ・マウロの教育思想に魅了された。研究中、デ・マウロの言説には何度も心を震わされた。

執筆を終え、本書では筆者が抱いた疑問への解答、つまり「言語を学ぶことは我々に何をもたらすのか」という問いへの答えを少なからず示せたのではないかと考える。実のところ、デ・マウロが名付けた「民主的言語教育」という言葉にその答えは集約されていると感じている。本書によってデ・マウロの教育思想や業績を日本の読者に届けられることを心から嬉しく思うと同時に、読者が言語教育の意義を共に感じ、考えてくださることを心から願っている。

最後に、本書の刊行にあたって、ご指導やご支援をいただいたすべての方々にこの場を借りて感謝の意を述べたい。日本およびイタリアの数多くの研究者や民主的言語教育を知る教員の協力なくして、本書の完成はなかった。

なかでも指導教員である西山先生には多大なるご支援をいただいた。複言語主義の歴史的解明の必要性を力強く後押しし、丁寧にまた忍耐強くご指導していただいた。また、GISCEL の研究者の方々、およびデ・マウロの妻であり研究者でもある Silvana Ferreri 氏には「10 のテーゼ」の本書への日本語訳掲載をご快諾いただいた。そして、くろしお出版の編集者である池上達昭氏には出版にあたって、多くのご助言をいただき、丁寧にご指導いただいた。本書に関わってくださった皆様に心から感謝申し上げる。

本書は「令和 5 年度 京都大学：人と社会の未来研究院若手出版助成」を得て出版された。京都大学のご支援にも深く感謝する。

2023 年 12 月

西島　順子（より こ）

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

序論　民主的言語教育の研究意義 1

1.　問題の所在 1

1.1　1970 年代のイタリアにおける言語教育 1

1.2　民主的言語教育とは 4

2.　問題提起 6

2.1　先行研究からの提起 6

2.2　研究の課題 11

3.　研究手法と本書の構成 12

第 1 章　近現代イタリアにおける言語状況と言語政策の展開 15

1.　イタリアにおける個別言語と言語変種の多様性 16

2.　言語政策と言語教育政策 21

2.1　イタリア王国統一期（1861 年～） 21

2.2　第一次世界大戦からファシズム政権期（1900 年代～） 25

2.3　第二次世界大戦後（1945 年～） 27

3.　1970 年頃の言語状況 30

4.　まとめ 38

第 2 章　イタリアにおける plurilinguismo の歴史的変遷 41

1.　民主的言語教育に見られる plurilinguismo 42

1.1　複言語主義の多義性 42

1.2　民主的言語教育と複言語主義との類似性 43

2.　イタリアにおける plurilinguismo の史的議論 46

2.1　イタリアにおける史的研究 46

2.2　史的研究の考察 48

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3. イタリアにおける plurilinguismo の形成過程 50
3.1 イタリアにおける plurilinguismo の創出（1950 年代）..... 50
3.2 文芸批評から言語学へ（1960 年代）..... 56
3.3 言語学から言語教育へ（1970 年代）..... 60
4. まとめ..... 63

第 3 章 トゥッリオ・デ・マウロの構想した plurilinguismo.....65
1. デ・マウロの plurilinguismo の概念..... 66
1.1 plurilinguismo への着想 66
1.2 plurilinguismo の構想 68
1.3 デ・マウロ自身による plurilinguismo の集成 75
2. デ・マウロの plurilinguismo の由来とその展開 78
2.1 言語学研究を起源とする plurilinguismo 78
2.2 政治思想を起源とする plurilinguismo 82
2.3 政治思想を背景とした言語教育の構想 86
3. まとめ..... 89

第 4 章 民主的言語教育における複言語教育の実践.....91
1. 1970 年代以降の教育実践に関する先行研究 92
2. 複言語教育の形成過程 95
3. 民主的言語教育における教育実践..... 96
3.1 *Parlare in Italia*（De Mauro, 1975c）に見られる教師養成 96
3.2 *Lingua e dialetti*（De Mauro & Lodi, 1979）に見られる教授法 ... 102
3.3 *Teoria e pratica del glotto-kit: Una carta d'identità per l'educazione linguistica*（Gensini & Vedovelli, 1983）に見られる評価指標..... 107
3.3.1 言語能力評価指標：glotto-kit..... 107
3.3.2 glotto-kit の有用性と理論 111
3.3.3 デ・マウロの glotto-kit の認識..... 116
3.3.4 glotto-kit が内包する plurilinguismo..... 125
4. まとめ..... 129

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

結論　民主的言語教育の教育的意義 133

付論　トゥッリオ・デ・マウロについて 143

研究者としての経歴 144

政治活動 147

民主的言語教育構築への原動力 150

家族の影響 150

言語の多様性への気づき 152

格差社会への気づき 153

付録　民主的言語教育のための 10 のテーゼ（Dieci tesi 日本語訳）.....157

Ⅰ．口語を中心とすること 157

Ⅱ．生物学的、感情的、知的、社会的生活に根ざす口語 157

Ⅲ．言語能力の多様性と複雑さ 158

Ⅳ．憲法における言語権 159

Ⅴ．これまでの言語教育の特徴 160

Ⅵ．これまでの言語教育の非効率性 161

Ⅶ．従来の言語教育の限界 162

Ⅷ．民主的言語教育の原則 166

Ⅸ．教師に向けた新しいカリキュラムのために 169

Ⅹ．結論 169

参考文献 171

索　引 177

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

序論

民主的言語教育の研究意義

1.　問題の所在

1.1　1970 年代のイタリアにおける言語教育

本書は、1970 年代のイタリアで提唱された民主的言語教育が包摂する複言語主義の概念と起源、そしてその教育実践を解明し、言語教育の歴史的文脈における民主的言語教育の意義を明らかにする。

現在、言語教育において一般的に理解されている複言語主義とは、欧州評議会が推進する言語教育の理念である。欧州評議会は人権や民主主義、法の支配などの分野で価値観を共有するため 1949 年に設立された。その政策の一つに言語教育も含まれており、2001 年に、ヨーロッパ統合の動きから、域内における就学・就労による人的移動を容易にするための外国語教育の共通参照枠となる *Common European Framework of Reference for Languages*（以下 CEFR）が発行された。この CEFR が提起する言語教育の理念は複言語・複文化主義と呼ばれている。

複言語主義 plurilinguisme/plurilingualism とは、文化的文脈において個人の言語経験が、家庭の言語から社会全体の言語や他民族の言語へと拡張していくなかで、これらを分離した状態にとどめておくのではなく、言語に関するあらゆる知識や経験を相互に関連、作用させ、コミュニケーション能

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

近現代イタリアにおける言語状況と言語政策の展開

本章は、1970 年代のイタリアで言語教育改革を目指し提唱された、民主的言語教育の背景にある当時の言語状況を、言語政策や言語教育政策の変遷、また言語に関わる統計資料や言説から明らかにすることを目的とする。

なぜ 1970 年代のイタリアで、複言語主義の先駆けともいえる多様な言語変種を容認する民主的言語教育が創出されたのであろうか。デ・マウロが言語教育に傾倒した背景には、イタリアの言語文化に携わる者として、イタリアに存在する言語格差とそれに連動した社会格差の状況を示す必要があったと後に自ら振り返っている（Ferreri & Guerriero, 1998: 17）[1]。デ・マウロは *Storia linguistica dell'Italia unita*『統一イタリアの言語史』（1963）にイタリアの言語的多様性を詳述し、その後もたびたび論考などにおいて、個別言語[2]

1　10 のテーゼの発表から 20 年目に行われたインタビューでデ・マウロは、1957 年に司祭ロレンツォ・ミラーニ（Lorenzo Milani, 1923–1967）が出版した *Esperienze pastorali*『羊飼いたちの経験』と 1967 年にバルビアナ学校の生徒の手により出版された *Lettera a una professoressa*『イタリアの学校変革論—落第生から女教師への手紙』に方言話者である民衆が過酷に虐げられている現実が描かれていることをあげ、その状況はイタリア語を知る特権保持者が支配者となり、イタリア語を知らぬ 97.5%（統一当時の割合）の者は被支配者となった状況であると指摘している。

2　個別言語とは、ある共同体で話される具体的な言語形式（規則や構造など）を持つ個々の言語を指す。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

イタリアにおける plurilinguismo の歴史的変遷

前章では、言語政策や言語教育政策の失敗から 1970 年代のイタリアで単一言語としてのイタリア語が十分普及しておらず、それに起因する教育の不平等や社会格差が存在していたことを解明した。また、この状況に鑑み、デ・マウロが言語教育改革となる民主的言語教育に着手し、提唱したことを明らかにした。

続く本章は、民主的言語教育の概念となる plurilinguismo がイタリアでいかに萌芽し、言語教育へと包摂されたのか、その起源と変遷を plurilinguismo に関わる言説にもとづき明らかにする。序論で述べた通り、民主的言語教育は欧州評議会の複言語主義と類似性があり（Costanzo, 2003）、またそこに plurilinguismo の概念も確認されている（Tempesta, 2008; Lo Duca, 2013）。しかし、その概念がどこから萌芽したものか、また欧州評議会の複言語主義と起源を共通とするのか明らかではない。起源と変遷を明らかにする過程でその概念と評価の変容を考察し、デ・マウロがそこに教育的価値を発見するまでのプロセスを詳らかにしたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

トゥッリオ・デ・マウロの構想した plurilinguismo

前章では、イタリアにおける plurilinguismo の起源を明らかにした。1950年代に文学界で unilinguismo との対比として用いられ始めたその用語が、その後、肯定的な概念として承認されるようになり、言語学界でデ・マウロも使用していたこと、またデ・マウロが1970年代にその概念を言語教育に援用し、複言語教育として民主的言語教育を構築したことを解明した。本章ではその plurilinguismo がいかなる概念を持って言語教育に応用されたのか、その展開を明らかにするため、民主的言語教育の提唱者デ・マウロの言説を分析し、考察する。

デ・マウロはイタリアの一般言語学者・言語哲学者である。1932年にナポリ県トッレ・アンヌンツィアータ市の薬剤師の家系に生まれ、ローマ・サピエンツァ大学の文学哲学部に学び、研究者としての道を歩んだ。2017年にローマで没するまで、その活躍は留まることなく、学界においてはローマ・サピエンツァ大学の文学哲学部の学部長や複数の学会の会長、また、政界においてはラツィオ州の評議会議員や第二次アマート政権（2000–2001）の公教育大臣などを務めている。デ・マウロの研究分野は幅広く、インドヨーロッパ語研究に始まり、イタリア語史、意味論・語彙論の歴史理論研究、ギリシャ語統語論、言語概念・言語研究史、言語哲学、教育言語、言語

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

民主的言語教育における複言語教育の実践

前章では10のテーゼを提案したデ・マウロが1960年代から、複言語主義を意味するplurilinguismoを使用していたこと、またその用語を「複言語状態」、「複言語政策」、そして「複言語能力」という概念で使用していたことを解明した。その起源を考察すると、「複言語状態」「複言語政策」はソシュールの理論や記号学など、そして歴史的・地理的観点からの社会言語学に由来することが判明した。その一方で「複言語能力」はデ・マウロの政治思想を包摂しており、グラムシの言語哲学の影響を受け、「複言語教育」として民主的言語教育へと展開したことが明らかとなった。つまり、デ・マウロのplurilinguismoの概念から「複言語教育」が構想され、それが民主的言語教育と称されたのである。では、その教育実践とはいかなるものであったか。

本章ではデ・マウロのplurilinguismoから展開された複言語教育の実際を明らかにする。民主的言語教育において、デ・マウロがplurilinguismoをどのように教育現場で承認し、教育実践として展開したのか、その教育の実態を分析し、狙いを解明する。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers